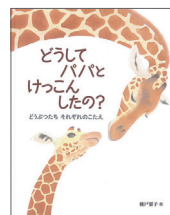




episode 40 娘にはじめて贈った絵本

投稿者 木下 良樹 さま(大阪府)



娘の初めての誕生日。プレゼントは何がいいかと夫婦で考えた結果、絵本を買うことにした。『どうしてパパとけっこんしたの？ どうぶつたちそれぞれのこたえ』を贈ることにした。パパである私からの贈り物としては若干やらしいかな、とも思える。

桃戸栗子 作
福音館書店 2022年

いろいろな動物のママたちは、どのような基準でパパを選んで結婚したのかが描かれているからだ。匂い、ダンス、一目ぼれや“なんとなく”まで、様々なパターンがあるらしい。どれも、人間にも当てはまるように思えてくるのは、合理的な意思決定だけに左右されるのではなく、直感やフィーリングも多分に交えた感覚に親近感を抱くからだろうか。

肝心の娘に読んでみても、反応はほとんど薄い。仕掛け絵本の方がよっぽど楽しそう。それでも、たまには読んで聞かせてみる。聞いてくれているかもわからないから、1人で音読の練習をしているようだ。それでも、めげずに読んでみることにしている。

子育てとは、子供を育てているようで、逆に親として育てられていることが多いと思う。子供に何かをしてほしいとき、有言実行、まずは自分が同じことをできていなければと自戒する。子供とコミュニケーションを取りたいければ、その輪に入りたいと思えるような夫婦間かを考える。絵本のような他愛のない質問が、素直にかかわせる家族だと嬉しい。そのために毎日、自分が試されているし、自分はパパの役目を果たしているか不安にもなる。この絵本を読みながら、夫として、もしくは父として、家族の一員であることを自覚する。家族に認めてもらいたいという願望でもある。

私が、私の思いを込めて、娘に初めて贈った絵本。その思いは家族への愛着であり、執着でもある。今後も、思い出したかのように読んで聞かせたい。家族になる最初の一步は、パパとママとの出会いなのだから。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2025」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



「どうしてパパとけっこんしたの？」

このことばは、作者・桃戸栗子氏の娘さんが5歳のある日、不意に発した質問です。栗子ママは咄嗟にひねり出した理由を口にしたのですが、娘ちゃんから「本当にそれで良かったの？」と、まさかのダメ出しをくらったのでした。これが、本作が誕生する発端です。「どうしてパパと結婚したの？」という娘さんの問いかけは、作者の心に強く印象づけるフレーズとなりました。

元々、動物の生態に興味があった作者は、動物の求愛行動に関する文献などを読み深めていました。探求するにつれ、「このおもしろさを絵本にできないか」との思いが沸き起こったとき、よみがえったのが遡ること5年前の娘さんのことばだったのです。こうして、幼い日の娘さんが発したことばがタイトルとなった本作で、絵本作家デビューするのです。



仲間と師と、創作する喜びが力に

大阪出身の桃戸氏は、高校時代より「絵本作家になりたい！」という夢を抱いていたといいます。高校卒業後、進学したデザイン専門学校で、イラストレーション専攻の先生がボローニャ国際絵本原画展に入選するという快挙の場に遭遇するのです。その作品を大谷記念美術館まで観に行ったことで、絵本作家への夢と、いつか「ボローニャへ」という思いが大きくなります。

夢を実現する第一歩となる機会が訪れたのは、結婚後、夫の地元である福岡に移住したことにはじまります。九州で唯一の絵本教室となる「絵本アカデミー^{けいこ}警固塾」に入門し、絵本作家や編集者といったプロの講師による指導を受けてノウハウを学ぶのです。絵本作家を目指す仲間を得て、創作する喜びが倍増し、一方では痛烈なダメ出しを講師の方々に受ける日々でした。

そんなとき、桃戸氏の脳裏に、専門学校時代に出会った「ボローニャ・チルドレン・ブックフェア」が呼び覚まされ、行動を起こすのです。イタリアのボローニャ見本市に出展したのでした。



ボローニャ・チルドレン・ブックフェア

「ボローニャ・チルドレン・ブックフェア」は、1964年から続く、児童書専門の世界的な見本市で、ロンドン、フランクフルトと並ぶ世界3大ブックフェアのひとつです。毎年春に開催され、見本市、国際原画展、国際児童図書賞の3つのイベントが同時に行われます。世界中から出版社や編集者、作家、イラストレーター、翻訳家などの児童書関係者が集まり、版權の交渉や商品化の権利の取引、それに出版社と作家やイラストレーターのマッチングの場となっています。

桃戸氏は自ら飛び込んだ聖地ボローニャで、ブックフェアの特色である「人との出会い」を得て、日本の出版者との縁を結んだのでした。



絵本作家・桃戸栗子デビュー

ボローニャで世界の作品を鑑賞し、また国際的な交流をもった桃戸氏は、翌年の2018年、国内のギャラリーが主催する絵本公募展「ピンポイント絵本コンペ」で入選するのです。ボローニャ体験が運氣上昇となった作者は、見本市で出会った福音館書店の編集者に入選作品のデータを送ると、なんと出版が決まったのです。

出版に当たって、一から動物を選定しなおして3年、ようやく作画というところ、コロナ禍に襲われます。編集者と会うこともできず、はじめてのことだらけで不安ばかりが募りました。そんななか、精力的に仕上げた原画を持って上京し、福音館書店の編集者に無事に渡せたときには、こみ上げるものがありました。紆余曲折ののち、2022年1月、桃戸栗子氏は長年の夢を果たしたのでした。

文献

- 1) 西須由紀、ほか監修：絵本のいま 絵本作家、2023-24（玄光社MOOK）、玄光社、東京、p.185,237、2023.
- 2) 市口桂子：ボローニャ・ブックフェア物語～絵本の町ができるまで、白水社、東京、217p、2013.

○本稿執筆にあたり、インタビューに応じていただきました桃戸栗子氏に御礼申し上げます。